



アジアン畳登場

アジアンテイストあるいはリゾート風のインテリアを好まれる方が多くいらっしやいますが、そんな方々へお勧めできるアジアン畳があります。

一見すると畳とはまるでカテゴリーが違う商品のようですが、畳の素材をそのまま使うことにより適度なクッション性・肌さわりを活かした商品です。

縁なし畳に次いでモダンな雰囲気にもマッチする畳が続々と登場することで従来の畳に対する見方もこれから変わってくるのかもしれない。



施工現場より

watch the construction site

高岡市にある古民家のようなお宅の畳を新調させていただきました。柱や梁は太く立派な造りで住宅の歴史を感じさせる趣深いものでした。

お使いの畳も歴史を感じさせる古いワラ床でしたので、お宅の雰囲気に合わせて黄金色の和紙表で新調させていただきました。

日本の家には畳が一番よく似合います。



都市思慮

島津良樹

What is the city?

「まちなか」三階建て木造住宅

近所の銭湯が廃業して跡地が十戸ほどの木造三階建て戸建住宅になった。「まちなか」住宅とも言うらしい。住宅王国の富山県での事情は判らないが、東京都では2008年の新築木造住宅の20%が三階建てだった。全国平均の5.3%に比べれば大変な高率である。最近の住宅需要は低調らしいが我が家への新聞折込チラシでは二階建てにはわざわざ「2階」と注記するほどの三階建てブームである。

この住宅、都心や副都心へ30分程度の「まちなか」で床面積が多少広めの戸建て持家メ리트がウリである。通常よりプラス一階（層）分のゆとりが持て、吹き抜けやスキップフロアなどの面白い内部空間が自由に設計できる。ロフトなどの収納スペー

スや屋内ガレージは容積率未算入だからオトク。加えて、地価下落と住宅ローンの金利引き下げや減税で資産形成と老後のリスクヘッジには最適、と銀行や政府筋の金融コンサルがそそのかす。

しかし本当に大都市の住文化の豊かさに資することができののだろうか。この一週間ほど掛けて我が家の周りの「まちなか」住宅を調べてみた。ありましたねえ！商店街の一本裏路地や近所の河川際の狭小敷地に窮屈そうに群生している。建物の高さ制限から斜路型駐車場や玄関入口が半地下で、隣家の軒とはほとんどくつつきそう。前にも後ろにも庭も空き地もない。おそらく床面積が100㎡に届く物件は少ないだろう。近所の銭湯の例のように少々大きめの旧家が数戸の「まちなか」に建て替わったことが想像できる。外部空間の過密感はどうにも耐え難いのである。なんなんだこれは、と唸りつつ見て歩いた数はおよそ百棟になった。

今までのところ、地元の工務店や不動産屋など業界主導で供給されていて、問題は建売だから買主のライフスタイルや建築意図、町場の住宅設計事務所への提言ですら建築の企画段階で入り込む隙間がないことである。「まちなか」住宅が昭和初期頃からのそこそこゆつたりした東京南郊の景色を駆逐している。やっとなり成熟してきた大都市近郊住宅地の質は間違いなく劣化しつつあると私は思う。

しまづ・よしき / 都市アナリスト。
京都大学に学び西山卯三に師事。東急総合研究所取締役地域開発研究部長・顧問を経て、立教大学大学院教授。08年よりS&Associatesを主宰。